

小泉八雲と日本

玉井 武

小泉八雲 (Lafcadio Hearn) が、東京西大久保の自宅で、狭心症をもつて逝去したのは、明治三十七年九月二十六日のことであつた。それから丁度今年は五十年目にあたる。由緒の地、山陰松江では小泉八雲五十年忌の法要が、その命日に取行われたと報ぜられている。

日頃八雲のことに關心をよせている自分は、この機会に何かさゝやかなりとも心の紀念とするものを書いてみたいと考えていた。然し亂雑多忙な身邊では、なかなかその希望の達成を許してくれない。その時、幸いにも、昭和十二年以來の友人 G. R. Storry 氏が、「Japan Society of London」で刊行してゐる「Bulletin」の最近號を、友情のしるしとして贈つてくれた。その中に Keith S. Bovey 氏の「小泉八雲と日本」(Lafcadio Hearn and Japan) の論考を見出したので、その要旨を邦譯して、五十年忌に手向けたいと考える次第である。

ラフカディオ・ハーンの名前自體が多少の説明を必要とする。パトリシオ・ラフカディオ・テッサマ・カールロス・ハーン (Patricio Lafcadio Tessima Carlos Hearn) と略さない名前になると尙更のことである。考えてみると

んな妙な名前をしていたからこそ自分の心がひきつけられるようなことにもなつたのだろう。

名前の詮索など人によつては全く不必要なこともある。何せかゝることは當人のどうしてみようもないことなのだから。然し、ハーンの場合は、彼がその風變りな名前によつて——と云うよりは、むしろその名前にまつわる異國的な起源によつて、彼自身いつも魅惑されていたのであるから、吾々は何等氣にすることなく名前の詮議が許されるといふわけである。ハーンの父はアイルランド生れで、英國陸軍の軍醫をつとめる一介の將校であつた。ギリシヤのイオニア諸島派遣軍勤務の軍醫少佐チャールズ・ブッシュ・ハーン (Charles Bush Hearn) が、黒目がちの美少女ローザ・テッシマ (Rosa Tessima) と戀仲になつてロマンスがはじまる。

後年ラフカディオ・ハーンの洩らしたところによると、この戀愛行路は險阻であつたらしい。即、ローザ・テッシマに對する求婚は、彼の女の兄弟達の感情を害し、彼等はこの異邦人の目論見を妨げることをして兄弟のつとめと思つたらしく、彼を襲つて暗殺の擧にいで、深い手傷を負わせて立去つた——という話になつてゐるが、その計畫が果してどういふ風に運ばれたか、兎に角、二人は結ばれて、その間にパトリシオ・ラフカディオ・テッシマ・カールス・ハーンが生まれた。パトリシオと云う名は、アイルランドの人はこの名がなくては治まらぬぐらいだから、どんな異國風にしたところで、當然入るべきものである。テッシマは母から貰つた名。カールスの説明はしかねるが、ラフカディオ——彼が一生涯使つていた名前——は、ハーンが生誕のリウカディア島 (Leucadia) の別名である。

ハーンは自分の生まれ——少くとも母方の生まれは忘れなかつた。幼い頃に仰いだ紺碧の空と、地中海ですごした少年時代の牧歌的な楽しみを、ヴィクトリア朝下のダブリン市に於ける冷嚴な生活にかえねばならなかつた彼であり、その後郷土を訪ねてみることも出来なかつた彼ではあつたが、地中海こそは、彼の魂の故郷として、たえず彼の胸中に生きていたのだ。彼は、生涯青い色にとりつかれてゐたとは云わぬまでも、魅惑されていた。それと同時に、

彼は常夏の故國、由緒も古い生國の祖先にまつわる様々のことを心に想像しては、時のたつのも忘れてしまふ始末であつた。ハーンは自分を獨立の個體とは考へなかつた。それは余りにも詩趣のない考へ方である。彼はむしろ、つとめて想像力を働かせて、數えることも出來ないほど多くの祖先の上を憶い、吾身を見るにも、何萬年の過去の愛と恐怖が現在に姿を現わして自己となつたものと考へようとした。「自分達の行いの一つ一つが、この體内に宿る亡き人々の靈の仕業でなくてなんであらう？」と彼は書いているが、これこそは彼の考へ方の典型的なものである。又「佛の畠の落穂」(Gleanings in Buddha-Fields)の中では、

私が一個人——一個の靈魂！ 否、私は一つの群衆である——幾億兆という考へも及はないほどおびたゞしい群衆なのだ。私は時代に時代を重ね、却憶に却憶を積んだものだ。今私を作つてゐる集合は、數えきれぬほどたびたび解散しては、また他の散らばつたものとまじり合つたのである。だから、次回の消散分解を何の懸念すべきことがあるらうか？ 恐らくは、太陽のさまざまの時代、燃燒の幾億萬年を経たのちに、私を組織する最上の要素が、再び集合することがあるかも知れない。

又曰く、

私共は一人残らず悉く、以前に生きていた生命の斷片の限りない混合體である。

日本に於ける生活をするには、彼は全く誂い向きの人間であつた。たゞに日本に於ける生活だけではなく、奇談や武士道や祖先崇拜の古い日本が遺した分身の「日本」という生活を營む恰好の人物だつた。やがて彼は歸化して日本に國籍を持つようになつたらしい。従つて日本姓を名乗るに至つたのも當然である。ハーンの全生涯が必然的に彼をして眞の故國を日本に求めさせるに至つたということは云い得るであらうが、又他方ハーンが日本に過したのは僅かに十四年、晩年の十四ヶ年であつたということも忘れてはならない。そして、この一風變つた、背の低い男の話は、

若い頃のことを等閑に附しては不完全を免れないということを自分は示す積りなのである。

英國の学校でハーンは一眼を失つた——これは如何なる場合に於ても由々しい癱疾であるが、彼にあつては及ぼすところはまことに常軌をこえた痛々しさだつた。視力を失つた眼は、そのまゝふくらんで、みにくい姿をとどめ、ハーンは一生の間、病的とも云いたいくらい痛烈に、失明した眼に惱まされた。片手を以て眼をおし、話かける相手に顔をそむけ、風變りの帽子を冠つてみたりした。おまけに、他の一眼は近眼で、何かを見ようとする時は、じつとのぞきこむようにして熟視する必要があつた。読書に當つては、小型望遠鏡を用いたが、それでも鼻は紙面にすれすれであつた。その結果は、小柄で、外國風の、風變りなはにかみ屋のハーンは、世間の目をひく恰好を呈していた。まるで物におびえる小鳥のようで、人間が大股であららしく歩みよる音に、あちこちと跳びまわる姿にさも似ていた。

ハーンは英國で就学した。彼は学校を嫌い、又聖書不信の言動を以て、教会学校の當局者達を震駭した。彼はフランスのカトリックの大学にやられたが、パリに逃亡を試みた。その後ロンドンで働かねばならぬ身となつたが、英國に對して愛情を持ち得ぬ彼は、十九歳の年にニューヨークへ渡つた。

アメリカでの生活は、ハーンが並外れの内氣者であつたことを物語つている。誰しもシンシナティ・エンクワイアラ（Cincinnati Enquirer）への彼の最初の寄稿に關心を寄せる。それは云う迄もなく、ハーンがジャーナリストであり、彼に文名をもたらした著書を世に送る迄に、既に何百万の文章を書いているからである。

ハーンは十九歳の青年で渡米し、四十になるまで滞留を続け、その間に佛領四印度を訪ねて二ヶ年を過した。渡米直後の數ヶ年の生活は明らかでない。誰一人としてその間の消息を知る者はなく、僅かに明らかにされていることは、メッセンジャー・ボーイに雇われようが、植字工として働こうが、給仕になろうが、屋根裏部屋に寐ようが、裏

庭で休もうが、自己の決意と目標、即ち文章を書く、立派な文章を書くという願望を忘れることがなかつた。

ハーンは余暇を傾けて、風變りの、怪奇な物語、幽霊、未知の國民、不気味な境遇などの話、各國の傳説・口碑に取材した物語を書き、縦横無盡に想像力を働かせて、後年怪奇物と稱される作品を世に送るに至つた。シンシナイ・エンクワイアラーの編集長であつたジョン・コッカーリル(John Cockerill)の前に、彼が一日現われた時、神経質そうに手に握つていたものは、實にこの種の作品の一篇に外ならなかつた。外部からの投稿が買つて貰えるかと臆病氣に尋ねてみると、編集長の返事では、そういうことも出来るとのこと、そこでハーンは上衣の下から原稿を取出して、机の上に置くと、まるでアイルランドの傳説にある妖精のように、部屋から消えうせて了つた。編集長はこの寄稿に感服して、ハーンを招いて、仕事を與えた。

最初彼は、コッカーリルの事務室で働いた。幽霊のように物靜かに、鼻を紙面にすりつけるようにして、日曜特輯の怪奇物を書いたのだ。その後彼を報導員にすることとなり、續いて、彼の擔當部門を最終的に決定するためのテスト期間がおとすれた。彼はインターヴューをとりに出されたが、何時間でも空しくすどし、歸社しては、目的の人を捕えられなかつたと報告した。調べてみると、彼は目的の家の前を往きつ戻りつするだけで、勇氣を出してベルを押すことが出来なかつたのである。彼を報導員にすることを斷念した編集長は云つた——若しハーンが誰かと面会する用事をもつて出されたとすれば、先方がわざわざ外まで出て来て、招き入れてくれなければ、ハーンと云う男は空手で歸つてくるだろう——と。

兎も角、報道員ではなくとも、ハーンは新聞に記事をかく仕事を持つことになり、シンシナイを振り出しに、後ニュー・オルレアンスに移つて、長年月に互つて新聞記者を勤めることになつたのである。

前にも述べた通り、ハーンは自分のことをラテン系の間人と考えていたのであるが、それは至極尤ものことであつ

た。彼は冗談に自分のことを「いかゞわしいラテン人」とか、「フランス根生のならずもの」と云つていた。彼は官能主義者であり、フローベル、ゲーテ、ポドレルを中心とするフランス浪漫派作家の流れを繼ぐものである。これらの作家達の著作に、ハーンが深く敬服した點が二つある——美と文学的技巧が即ちそれである。彼等の作品は、猥雑さをあらわに示さぬ、洗練された傑作で、肉感的なものを忘れて、構想と手法のあざやかな美しさにうたれる。これこそはまさにハーンの求めてやまぬところであつた。

彼は寸暇を捧げて、傾倒するこれらの作家達の作品を英譯した。その最初に手がけたものはゲーテの“Avatar”であつたが、一八七〇年代の中西部 (Middle West) の清教徒的な輿論に臆せずして、これを出版してやろうと云つてくれる人はなかつた。彼は原稿を火に投じて、書き直すことも別にしなかつた。他の作品の英譯はその後出版されたが、皆これら浪漫派の作家達のものであつた。

ハーンのシンシナテイ生活は、楽しいものではなかつた。友達でもなかつたなら、あんな五・六年に及ぶ滞在とはならなかつたらう。彼は矢張り自分の本来の分野はラテン系の國だと考え、ポルトガルやスペインの古都廢墟を訪れ、オリノコやアマゾンの川を溯り、誰も知らない物語をさぐる日を夢みていた。この夢は實現されなかつたが、二十七歳のハーンが、ニュー・オルレアンスの町に身を托して、心安らかさを深く味つたことは明らかである。それは彼の永遠の安住地「日本」を求めての巡禮の旅の第一歩であつた。ニュー・オルレアンスは熱帯に屬し、温かく、國際的な雰圍氣をもち、變つた風景に富んでいた。到着匆匆から、ハーンは踏査に氣負いたつた。

ハーンのニュー・オルレアンス生活は、後年の日本生活に比敵する年月に達しているのであるが、逐次出版した日本に關する著書に比すべきものをこの地では出してない。尤もクリオール (Creole) の格諺を集めて、ゴンボー・ゼベス (Gombo Zebes) という書名で出版し、外に料理の本 (書名は La Cuisine Creole——筆者註) を一冊出

してはいるが。彼は新聞記者として「ニュー・オルレアンス・タイムス——デモクラット」に論説や文藝批評を寄せ、生計をたてるのにいそがしかつた。閑暇を見出しては、この町でも一風變つた、むさくるしい界限を、クリオルの唄や諺を求め、珍しい食物、變つた風光、新しいにおいを探して歩く姿が見受けられた。ハーンの嗅覺は、視覺の弱さを埋めあわせる程に鋭敏で、當時の彼は、八分の一混血兒、四分の一混血兒、純粹アフリカ人の區別を嗅覺だけで識別することが出来るると云つていた。

ハーンの放浪癖を除けば、彼が日本を訪れたのは實に偶然の機会によるものだということには注目し難い。ニュー・オルレアンスに出向いて行つたのは、新聞の仕事をするためであつたが、それと同様に、日本に赴いたのは、ハーパース・マガジーンに寄稿をするためで、挿繪畫家を同伴した。

しかし、ラフカディオは、東京灣を隔て、始めて富士山の姿を仰いだ時、日本の美に魅せられてしまつた。間もなく、ハーパース・マガジーンとの契約を破棄して、余生を日本で暮すような方法を講じた。かくして、「知られぬ日本の面影」(Glimpses of Unfamiliar Japan)に始まり、亡くなつた年の「日本」(Japan, an Attempt at Interpretation)に終る一連の著述によつて、彼の名聲は確立された。

「知られぬ日本の面影」は急いで書かれたもので、彼をとりまく數知れない目新しい光景や音やにおいを記録にとどめようと、我武者羅になつて慾ばつてゐるために、後年の作品よりも洗練されていない。後年彼の書いたものの中で述懐しているところによれば、自分の心を謙虚にする爲に、この「知られぬ日本の面影」を半頁程読んでみる——すると、一體どうしてこんな悪文が綴れたんだろうかと訝しくもなれば、腹も立つてくる、自分は亞流の又亞流の悪文家で、追い立ても食いかねない人間だと分つてくる——と云つてゐる。然し「知られぬ日本の面影」は、日本について書かれた最初の本としては傑作であろう。よしんば、ハーンの批評眼が、續々と目にうつる珍しいものに曲げら

れてしまつたとしても、或は何でも無差別にやたらと鑑賞していたにしても、そう云つた中から生れて來たもの、しかもそれを十分に埋合わせるものは、ハーンの胸奥を揺がす歡喜であり、熱烈な感激であり、更には精緻な觀察であつたのである。

ハーンが日本へ携えてきたものは僅かであつたが、その中にチェンバレン教授への紹介狀があつた。氏は「日本の風物」(Things Japanese)の著者で、當時東京大学で教鞭をとつていた。二人の友情は深まり、ハーンが書いた澤山の手紙の相當數はチェンバレン教授宛のものであり、これを書物にすれば二冊にはなるであらう。同教授はハーンのために松江の英語教師の職を求めてやり、ハーンはこの地で生涯の最も幸福な年を送つた。

古都松江でハーンは「知られぬ日本の面影」を書いた。「知られぬ日本」とは舊日本のことで、そこでは古來の信心が尙生き生きとした力をもつており、古い慣習が人の心を鼓舞する勢いを有していた。ハーンは自分が一八九〇年(明治二十三年——筆者註)に日本へ到着し、西歐の産業主義の外とうを重く着せられ、二十世紀の貪欲と性急の犠牲とならぬうちに、日本の胸と魂——日本語で一語で云えば「心」、即ち彼の後著の表題である——を採ねることが出來たことを何にかえがたい悦びと感謝した。明治維新の行われた時分から日本に來住していた人達への羨望の氣持を彼は殆どかくしきれなかつた。彼は亡くなる年の一九〇四年(明治三十七年——筆者註)に彼は次ぎのように云つてゐる。――

三十余年前、まだ表面の装いを變える前のこの美しい不思議國を訪れて、生活の珍しい姿、即、津々浦々までの上品さ、大勢の人達の無言の微笑、勞苦に對する我慢強い考え方、不幸と鬭争の跡のないことなどを直接觀察する特權を與えられた人達は本當に幸運であつた。今でさえ、片田舎に於ては、海外からの影響は余り國內に變化を與えず、従つて昔ながらの美しいものは今尙その珍しい姿をとどめてゐるが、普通一般の通り客などには、その持

ち味は分らない。

ハーンはつとめて物の意味するところを理解しようと試み、従つて著作も物事を説明的に扱ふことがすくなくなつて來た。「日本の面影」では目に映するもの、即、社寺・街路・庭園・習慣・衣服・色彩の描寫が主であつたが、これに續いて發刊された「東の國より」(Out of the East)や「心」(Kokoro)では、既に彼は最初の興奮時代を卒業している。その頃になると、ハーンは最早日本人を外側から眺めてはいない。彼は必死になつて、その内側に達しようとしている。つまり、日本人を理解し、日本人になろうとしている。彼自身の言葉を借りて云えば、彼は「神道の漠然としていながら計り知ることの出來ない感情」に恍惚として、神道のさとす忠と孝を示す物語を、心からの讚嘆をこめて語つた。その一つを示せば、

「『これはその方の父親の首に間違はないか』と殿様が僅か七歳の武士の子にきいた。子供はたゞちに事情をさつた。自分の前にすえられた生まましい首は、父親のではなかつた。大名にそう信じさせていたのだ。だがそれにはまだ仕掛けが必要であつた。そこで子供は、敬けんな悲しみをたゞえて、その首に敬禮をして、にわかには腹をたちきつた。殿様の疑念も、この孝心の漲る血潮の前にはことごとく晴れ、おきてを犯した父親は逃亡し終えた。」

扱て、ハーンは夢の都「松江」で僅かに一ケ年を送り得たにすぎない。彼は暖國を求めてこれを熊本に見出し、再びチェンパレン教授の斡旋によつて、官立学校の英語教師に任命された。間もなく彼はこれをくやみ、感慨ふかそうに松江のことを書いてゐる。

「出雲の國に長く住んでから一度そこを出てみないと、他國——例えば私の今住んでいる國——とどんなに違ふものかが分りません。この國には出雲人のあつさりとした魅力などみたくてもありません」

学校の運営は近代の西洋式に則り、ハーンの望みを粉々にした。町は醜く、平凡で、半歐化した軍隊町で、巡禮の歌と寺の鐘の代りに、ラツパの音、調練の聲が響きわたつていた。失望落膽（尤もいつ迄もそうではなかつたが）の極、彼は一友人への手紙に述懐している——

「あゝ、幻想は消えて了つた！ 九州の日本はヨーロッパそっくり。違ふのは友達のいないことだけだ」

同じ手紙の中で彼は次の如くも呟つている。

「こゝの官立学校の生徒は子供つばいところがなくて大人です。先生方は全然私に口をききません。私は学校へ行く時も、授業が終つて歸る時も、全くの獨りつば。精神的な友垣と云えば書物だけです。でも家庭に入れば萬事が素晴らしいです」

書物と家庭——これこそは、この醜い町に於けるハーンの唯二つの生活の慰安で、經濟的な必要から生じたものである。彼の家庭について云えば、勿論彼は日本の武士の娘と結婚して、二人の子供をもうけ、年上の息子の一雄は恐らく現存していることであろうが、ハーンの可愛がり方も一通りではなかつた。読書の方は、視力の心配をたえず持ちながらも、たやすことなく、読んだものについては、澤山の友達と交わした手紙の數も夥しい。

何よりも、彼は日本研究を廢しなかつた。觀察し、記録し、吟味し、蒐集し、没頭した。物語・童話にきゝ入り、ならわし・ことわざ・唄・物の名・經驗をひろくあつめた。大工が家を建てる仕事の始めから觀察し、作業全體をこくめいに記録し、建築の進行状態を調べて、後刻の用に備えた。彼は又何時間もお寺ですごし、墓地になると尙一層の時間を費して、小さな墓石に刻まれた文字をのぞきこむようにみて歩いた。昔語りをきかせてくれるによい年寄りなら、乞食であろうと、占い師であろうと、又は職人であろうと、誰彼れを問はず親しくした。

その上に、彼は大谷氏と云う少くとも一人の勤勉な助手を持つことが出来た。氏はハーンにおそわつた人で、ハーンのかいた物語や論文のために資料をさがすことに盡力した。

次に出版されたもの——「異國情趣と回顧」(Exotics and Retrospectives)、「靈の日本」(In Ghostly Japan)、「影」(Shadowings)、「日本雜事」(Japanese Miscellany)、「骨董」(Kotto)、「怪談」(Kwaidan)——に於ては、彼はそれまで彼の心の寶庫に收めておいた題材や、無數の備忘録を丹念に調べてこれを筆にすることを試みなかつた。彼の勞作の中には、今後もつと詳細に扱う時間がないかも知れないという懸念から、澤山の材料だけを取集めて内容にしているものもある。「靈の日本」の中の「日本佛教格諺」や、「日本雜事」中の「日本の子供の歌」がそれに屬するものである。

そう云うけれど、物語が矢張一番多いし、それに彼のお得意は物語だつたのである。このような物語のことに筆を及ぼそうとするのは實に差出がましい話で、読者諸兄は恐らく御存じのことゝ思い、ここでは「おしどり」の短篇を

OSHDORI

There was a falconer and hunter, named Sonjō, who lived in the district called Tamura-no-Gō, of the province of Mutsu. One day he went out hunting, and could not find any game. But on his way home, at a place called Akanuma, he perceived a pair of oshidori (mandarin-ducks), swimming together in a river that he was about to cross. To kill oshidori is not good; but Sonjō happened to be very hungry, and he shot at the pair. His arrow pierced the male: the female escaped into the rushes of the farther shore, and disappeared. Sonjo took the dead bird home, and cooked it.

That night he dreamed a dreary dream. It seemed to him that a beautiful woman came into his room, and stood by his pillow, and began to weep. So bitterly did she weep that Sonjo felt as if his heart were being torn out while he listened. And the woman cried to him: "Why—oh! why did you kill him?—of what wrong was he guilty?.. At Akanuma we were so happy together—and you killed him!.. What harm did he ever do you? Do you even know what you have done?—oh! do you know what a cruel, what a wicked thing you have done?.. Me too you have killed—for I will not live without my husband!.. Only to tell you this I came".. Then again she wept aloud—sobbitterly that the voice of her crying pierced into the marrow of the listener's bones;—and she sobbed out the words of this poem:

Hi kurureba

Sasoeshi mono wo—

Akanuma no

Makomo no kure no

Hitori-ne zo uki!

(At the coming of twilight I invited him to return with me—! Now to sleep alone in the shadow of the rushes of Akanuma—ah! what misery unspeakable!) And after having uttered these verses she exclaimed: "Ah, you do not know—you cannot know what you have done! But to-morrow, when you go to Akanuma, you will see—you will see...." So saying, and weeping very piteously, she went away.

When Sonjo awoke in the morning, this dream remained so vivid in his mind that he was greatly troubled. He remembered the words: "But to-morrow, when you go to Akanuma, you will see—you will see." And he resolved to go there at once, that he might learn whether his dream was anything more than dream.

So he went to Akanuma; and there, when he came to the river-bank, he saw the female oshidori swimming alone. In the same moment the bird perceived Sonjō; but, instead of trying to escape, she swam straight toward him, looking at him the while in a strange fixed way. Then with her beak, she suddenly tore open her own body, and died before the hunter's eyes....

「十六日」云々

JIU-ROKU-ZAKURA

In Wakegori, a district of the province of Iyo, there is a very ancient and famous cherry-tree, called "Jiu-roku-zakura," or "the Cherry-tree of the Sixteenth day," because it blooms every year upon the sixteenth day of the first month (by the old lunar calendar)—and only upon that day. Thus the time of its flowering is the Period of Great Cold—though the natural habit of a cherry-tree is to wait for the spring season before venturing to blossom. But the Jiu-roku-zakura blossoms with a life that is not—or, at least, was not originally—its own. There is the ghost of a man in that tree.

He was a samurai of Iyo; and the tree grew in his garden; and it used to flower at the usual time—that is to say, about the end of March or the beginning of April. He had played under that tree when he was a child; and his parents and grandparents and ancestors had hung to its blossoming branches, season after season for more than a hundred years, bright strips of colored paper inscribed with poems of praise. He himself became very old—outliving all his children; and there was nothing in the world left for him to love except that tree. And lo! in the summer of a certain year, the tree withered and died!

Exceedingly the old man sorrowed for his tree. Then kind neighbors found him a young and beautiful cherry-tree, and planted it in his garden—hoping thus to comfort him. And he thanked them, and pretended to be glad. But really his heart was full of pain: for he had loved the old

tree so well that nothing could have consoled him for the loss of it.

At last there came to him a happy thought: he remembered a way by which the perishing tree might be saved. (It was the sixteenth day of the first month.) Alone he went into his garden, and bowed down before the withered tree, and spoke to it, saying: "Now deign, I beseech you, once more to bloom—because I am going to die in your stead." (For it is believed that one can really give away one's life to another person, or to a creature, or even to a tree, by the favor of the gods;—and thus to transfer one's life is expressed by the term "migawari ni tatsu," "to act as a substitute.") Then under that tree he spread a white cloth, and divers coverings, and sat down upon the coverings, and performed hara-kiri after the fashion of a samurai. And the ghost of him went into the tree, and made it blossom in that same hour.

And every year it still blooms on the sixteenth day of the first month, in the season of snow.

確かに想像の生み出したもので、常規を逸した物語ではあるが、しかし何と美しい表現ではないか。自分の知る限りに於て、今日に到るも尙明らかにされないことは、これらの物語がどの程度にハーン自身のものであるかという点である。その多くは云うまでもなく、口づたえにきいたか、或は日本の古書から探し出した話をたゞ美しく譯出したものなのであろうが、中には純粹にハーンの手になる作品で、話の種子だけが外部から来たものもあるに違いないと思う。ハーンは恐らく風變りな珍しいものや美しい繪畫的なものを掘り出そうと決心したことであろう。彼のこの決心はいさゝか極端にはしり、彼がロマンスを見出した物語も、その標準を少しく想像的でなくすれば全然そのよう

な感じを味えなかつたのである。然しそれは物の裏を見抜く力を欠くために眞と美を見出し得ないという缺點にまさること万々のものである。

かくて我々は、ハーンの比類ない勤勉、肉體的な不利を物ともしない勇氣、そして日本の眞實の姿を探し得るといふ自信とに負うところが實に大きいのである。彼は最大の寶——翻譯者が充たしてくれた最大の寶の一つを我々に遺してくれたのだ。

日本人達がハーンをどう考えているかということを知るのは興味あることに違いない。彼がかつて尊敬されていたし、又今でも尊敬されているという證左はある。何と云つても日本の詩人野口米次郎氏の述べた以上の高い賞讃を想像することは困難である。即、氏はその著「日本に於ける小泉八雲」に於て云う——「日本人自身が突然ハーンの魔術にあつて、新生命を與えられた」と。又曰く、「實際、我々がずつと昔に忘却して了つた古いロマンスが、又持ち出されて我々の耳をうち、塵の下に埋められていた昔の美しいものが、驚くべき新しい光彩を添えて再びあらわれた」と。

野口氏は隨所に於て、ハーンの英譯は日本語の單語一つの誤譯もないと語り、ハーンは昔の日本の持つていた魅力にびつたりあつた日本の作家となつたと云つてゐる。

こゝにチェインバレン教授の意見を加えておこう。「日本の風物」(Things Japanese)の中で、教授は

「日本人の生活・作法・思想・抱負・教室・唄う女・政治家——人間だけではなく、幽霊や傳説、ヨーロッパ人の中でハーンだけが足跡を印した遠くの島の景色」
を描いたハーンの記事は、柔らかく、優雅であるのみならず、微細にわたつて科学的な正確さがあると評している。

簡単にハーンの生涯にもどると、彼は熊本を去つて、東京の帝國大学に於ける英文学の講師に任命される迄は、神戸クロニクルの爲に暫時社説を書く仕事についていた。彼の刻苦精勵と、一八九五年以降、少くも毎年一冊の著書刊行にもかゝわらず、ハーンは著作によつて生計をたてなかつた。彼が實務の妙をわきまえぬ人であつたからか、家族の経費が書物からの収入を上廻つていたためか、亡くなる迄、教師として、講師として、寸暇もない有様だつた。

こゝで彼の別な文学的な仕事に一寸觸れておくことにする。彼の書簡のことは既に取上げた。彼の著書の第三部門は講義集である。發刊された講義集にあらわれたところによると、僅かに一つの評言が彼について許されるのみである。ハーンの英・佛文学講義集を読みると、驚くべき程辛抱強く高潔な人間像が描かれる。ハーンは自分の講義案をとつておかなかつた。弟子達がハーンの歿後かなり経つて講義集を出版して、始めてハーンが各講義を学生達に惜し氣もなく與えていたことが分つた。彼は外部の世界が、彼の義務遂行振りがどうであるかとか、出版に示したと同じ配慮と辛苦を拂つているかどうかを知るなどと云うことは考へもしなかつた。彼の辛抱強さについては、彼が長い講義をする時に、学生が外國語で、一語一語筆記が出来るように話してやつたということをしるせばそれで足りるであらう。

彼は最後の年に於て、大学の講師の椅子を失い、これにかわる収入の源泉として、合衆國への講演旅行を考えていた。この目的のために續きものの論文をかき始めたが、これらは講演として話されることなく、死後になつて印刷に付され、「日本」という彼の著作中でも最も議論的なものとなつた。

當協会の学識高い会員であるジョン・パリス氏 (John Paris) は次ぎの如く云つておられる (或は少くとも、氏の小説の一つに出てくる人物に云わせている) ——

「ハンの日本に對する態度は三段階を経ているが、最終段階は「覺醒」であつた。この覺醒の段階に於て、彼は傑作「日本」を著わした」

私は大膽にも、氏の「日本」をハーンの傑作とする見解、並びにそれが彼の覺醒した姿をあらわしているという見解に反對する者である。

「日本」はハーンの傑作ではない。それは彼にはびつたりとしていない役である。ハーンのお得意は物語と幻想にあつた。さゝやかなことを描寫する筆に長じていた。然し、アメリカ迄の講演旅行に出かけると云うのに、妖鬼や蛙や猫の話をするわけにはいかない。それでハーンもこのような論文を書く破目となつたのであり、そうして健康までも損つてしまつたのである。私はハーンを文学的工匠として扱つて來た。彼の作品をみると、精緻な彫刻の完成された寶石と云つた感じである。従つてハーンが「日本」のような著作に着手するということは、あたかも生涯を傾けて、たとえようもない美しい寶石を磨いていた工匠が、最後になつて大理石の胸像を刻むようなものである。出來上つた胸像は立派なものかも知れない、然しそれは工匠の特性を示すものではなく、その才能を示すと云うよりは隠し

ているものと云えよう。

ハーンの覺醒ということは大いに論ずる價值があるろう。自分はまだその證據を得ていない。「日本」を読んで、覺醒を示していると思われる感情は、同じく「心」にも、「東の國より」にも感得されるし、又パリス氏の稱する覺醒したハーン——即、國民の深い保守主義、自惚、干渉の疑惑、家族制度の息苦しさ——などはむしろハーンの賞讃していたところである。

自分は又「日本」がハーンの最後の作品であるために意味深いということにも賛意を表し得ない。何となれば、彼は同じ一九〇四年、即、臨終の年に、「變つた事の話と研究」(Stories and Studies of Strange Things)をかいて居り、これは彼の名を高くしたものであるから。自分は何よりも「怪談」の最後についでいる小さな蚊の隨筆の中の次ぎの文章を掲げて結論としたい——

“Besides, I should like, when my time comes, to be laid away in some Puddhist graveyard of the ancient kind—so that my ghostly company should be ancient, caring nothing for the fashions and the changes and the disintegrations of Meiji. That old cemetery behind my garden would be a suitable place. Everything there is beautiful with a beauty of exceeding and startling queeress; each tree and stone has been shaped by some old, old ideal which no longer exists in any living brain; even the shadows are not of this time and sun, but of a world forgotten, that never knew steam or electricity or magnetism. Also in the boom of the big bell there is a quaintness of tone

which waken feelings, so strangely far-away from all the nineteenth century part of me, that the faint blind stirrings of them make me afraid—deliciously afraid. Never do I hear that billowing peal but I become aware of a striving and a fluttering in the abyssal part of my ghost—a sensation as of memories struggling to reach the light beyond the obscurations of a million million deaths and births. I hope to remain within hearing of that bell... And considering the possibility of my being doomed to the state of a Jiki-keitsu-gaki, I want to have my chance of being reborn in some bamboo flower-cup, or mizutame, whence I might issue softly, singing my thin and pungent song, to bite some people that I know.”